

心理臨床におけるずれに関する研究

—箱庭を介した調査より—

市原 有希子

1. 問題・目的

心理療法ではセラピストの態度として、“共感的理解” (Rogers, 1957)、“母子一体性” (Kalff, 1966) 等の言葉で表わされるような、クライアントの存在全体に寄り沿い、クライアントを受けとめていく態度がまず大切であるとされる。このようなセラピストの態度は、セラピストが自身の主観を入れ込んでクライアントの体験している主観的世界を理解すること、そして、クライアントへの心理的援助へとつながると考えられている。以下、このようなセラピストの態度を本研究では“沿う”と表す。

心理臨床においてずれは一般的に否定的なニュアンスで捉えられていると思われるが、経験を積んだ臨床家たちがずれについて述べている文献を通して、心理臨床におけるずれはクライアントとセラピストという治療関係におけるずれと表現する者と表現されたこととの間に起こるずれとに区別され、治療関係におけるずれは以下の性質や働きを有していると考えられた (市原, 2009) : ずれは“沿う”ではないこととして表れうる、ずれにはポジティブな面とネガティブな面の二面性がある、関係によってずれの意味が異なるという多義性がある、予め客観的に指定されるようなことではない、ずれは表れてからは治療関係における手がかりとなりうる。また、実際の治療関係では一見ずれているにもかかわらず治療が進展する場合がある (河合, 1997) が、その場合のセラピストのこころの動きについて、河合 (1997) は、自分のすることは正しい・クライアントとずれていない、とセラピストが思うからこそずれてしまうのが大事である、と述べる。そのようにセラピストが思っただけでケースに主体的にコミットする過程があった上でずれが起こったという事態は、セラピストにとって思っていたこととは異なる矛盾した事態である。その矛盾にセラピストが自分のすべてで困り切ることが、ずれが治療的・創造的に働くのに大切であると考えられている。また、ずれが生じた時、セラピストは「それまで自分はクライアントに“沿う”ことができるのではないかと期待していた」と事後的に自覚することになると考えられる。

このように治療関係におけるずれの性質や働きについて、また、そのずれが治療的・創造的に働く際のセラピストのこころの動きについて考えられてきているが、治療関係におけるずれのように具体的な人間どうしの二者間で起こるずれについては、心理臨床では今まで主に事例検討という個別的な方法で考えられてきたと思われるⁱⁱ。そこで本研究では治療関係におけるずれを「まず相手に沿っていかうとし、自分は相手に沿えるのではと期待し、しかしその期待とくい違う事態が生じること」とし、ずれの生起自体や生起したずれが治療的・創造的に働くにはどのようなことが関わっているのかを調査を通して実証的に検討する。

本研究ではこのようなずれを体験する場面として、面識のない2人が相手に沿っていかうとしながら交互に箱庭にアイテムを置いて箱庭作品を作るという方法をとる（以下、この方法をペア箱庭と表す）。箱庭は「箱の大きさがちょうど一つの視野にバツと入る」（河合、1993）ことから2人の交流が起きやすいと考えられる。また河合（1993）によると、「意識と無意識の交錯するあたりに『イメージⁱⁱⁱの世界』がある」、そしてイメージは「無意識から意識へのコミュニケーションのメディア」であって、その「イメージ」の1つが箱庭である。このように箱庭は意識と無意識が交錯するあたりで起こることであり、イメージを表現する。箱庭には無意識に開ける面もあれば、「箱庭はクライアントの相当な意識的関与をもってつくられ、……クライアント自身のコントロールが相当に及んでいる」（河合、1986）とあるように、意識的な統制を行える面もあると考えられる。ペア箱庭では相手とずれを起こさないように意識的に防衛することも、無意識に開けてずれの生起等予想外の動きがもたらされることも可能だろう。そもそもずれが生起するか、また生起した場合はどうなるか等の様相が、箱庭では砂とアイテムを通して具体的に示されると考えられることから、箱庭を用いた。

ずれの生起の仕方及びずれがいかに関わるかは、もともとの個人の性格特性によっても異なると考えられる。2人の人間が出会い、相手に沿っていかうと交流が生まれるとき、まずは「相手はどう思っているだろうか」「自分は相手にこう思われているのではないか」と相手やひいては自分を意識するところから2人の関係の多くは始まると本研究では仮定する。2人のやりとりが進むにつれて「自分は相手に沿えるのではないか」と自分が期待するとき、それはいわば自分の読みの中で相手を理解しようとしていることだと考えられる。しかし、それからずれが生起した場合、それは自分が相手とずれていたことに出会い、自分の読みが崩れて自分のやり方が通用なくなり、相手という他者を強く感じるのだと考えられる。このように行き詰った状況では何がこの状況を打破するきっかけとなりうるのだろうか。大山（2001）によると、「イメージにおいて、『私が鳥であって鳥でない』という、同一律や矛盾律を打ち破る言説が重要な意味をなすことは多い。

（イメージは）それ自身の自律的な意味を持ち、個人の意味構成を超え、さまざまなものと結びつき意味を構成する潜在力を持っている。そしてこの自律性こそが、個人の意味構成の変容を導く鍵となるのである。」（括弧は筆者補足）。このことから、ずれに出会い、矛盾し困った状況の中、ずれが創造的な意味へと展開するところに、「個人の意味構成の変容を導く鍵」であるイメージは深く関わっていると考えられる。よって、もともと個人がもっている、相手や自分を意識する程度、すなわち自意識の程度と、イメージとの親和性の程度によって、ペア箱庭のたどる制作過程は異なると考えられる。

以上より、本研究では、ペア箱庭の制作過程を通して具体的な二者間におけるずれの生起の有無とその後の様相をそれら個人の性格特性との関連から検討する（調査2）。なお、イメージへの親和性を測る尺度を作成し、因子構造を調べるための調査も行う（調査1）。

2. 調査1

2-1. 方法

(1)被験者・調査時期：大学生・大学院生 61名（男性 33名・女性 28名、平均 24.3歳、標準偏差 3.89）だった。2006年10月に行った。

(2)調査材料：イメージの特性と考えられる自律性・具象性・集約性（多義性）・直接性・象徴性・創造性（河合、1991）に関する項目を樋口・岡田（2000）、河合（1991）、川寄（2003）、Meier（1968）を参考を筆者が作成した。イメージ自体への親和性に関する項目も小川ら（1969）を参考に作成し、それらも加えて全体の尺度項目を作成した。項目作成後、心理臨床専攻の大学院生1名と文章内容を協議し、項目を決定した。評価は「まったくあてはまらない」から「よくあてはまる」までの5件法とした。これらの調査材料を質問紙として冊子にし、個別に配布して後日回答された質問紙を回収した。

2-2. 結果

各項目の回答を「まったくあてはまらない」を1点、「よくあてはまる」を5点として得点化した。天井効果がみられた2項目を除き、残り30項目を対象に因子分析を行った。因子数を指定せず、最小の固有値=1で主成分分析による因子分析を行った。累積寄与率約50%を基準とし、因子数=5で再び因子分析を行った（累積寄与率約52.85%、プロマックス回転後の因子負荷量を表1に示す）。因子負荷量0.4以上を示した項目を基準とし、クロンバックの α 係数及び各因子の解釈可能性を考え、表1に示す項目を因子の項目として採用した。各因子の内容より、各因子を命名した。因子1は、自分の内側から起こるイメージの必然的な力を表していることから、「イメージの必然性」因子とした。因子2は、自分の意識が及ばず、イメージ自体が独自の動きを持っていることとしてイメージを捉え、イメージに対して自分を開いてゆだねているさまを表していることから、「イメージへの自律性」因子とした。因子3は、イメージの持つ、生き生きとした直接的な力を表していることから、「イメージの直接性」因子とした。因子4は、イメージに関わる際、最初は自分の意志を貫こうとするが途中でそれができないことに会おうさまを表していることから、「イメージの意外性」因子とした。因子5は、自分がコントロールできないことやすぐには納得しがたいようなことに開かれている態度を表していることから、「非合理的態度」因子とした。調査1の結果得られたこの尺度全体を、イメージ親和性尺度と名づけた。各因子のクロンバックの α 係数はそれぞれ、0.768、0.78、0.795、0.689、0.629だった。

3. 調査2

3-1. 方法

(1)被験者・調査時期：大学生・大学院生から成る、お互い面識のない人どうしのペア18組（計36名、男性24名・女性12名、平均22.7歳、標準偏差3.02）だった。男性ペアは8組、女性ペアは2組、異性ペアは8組だった。2006年10～12月に行った。

(2)手続き：複数人で行う調査であることを被験者に予め了承してもらった上で調査を行った。筆者は被験者どうしがお互いに面識がないことを確認し、「2人で交互にアイテムを置き、20～30分もしくは5～6巡をめどに箱庭の作品を制作して下さい。自分の番になったらアイテムが置かれたことを受けて、相手の表現に沿いつつ、自分の置きたいアイテムを置いて下さい」と教示した。手順は岡田（1993）のグループ箱庭療法の方法にほぼ準じた。制作前、筆者は被験者に以下の5点を伝えた：(i)制作中は話さない、(ii)原則として1回につきアイテムを1つ置く（セットやペアで置きたいと思ったものについては、複数個置くのも可能）、(iii)一度置かれたアイテムは棚に戻さない（砂箱の中でのアイテムの移動は可能）、(iv)後に置く人（以下、後手と表す）

表1. イメージ親和性尺度 因子分析(主成分分析・因子数=5・プロマックス回転後)の結果

	F1	F2	F3	F4	F5
F1「イメージの必然性」因子					
11 自分の内にひらめくものを大切にしようである。	0.853	0.135	-0.057	-0.033	-0.056
23 とつぜん考えがひらめく。	0.817	0.335	-0.251	0.198	-0.061
26 自分の内面に浮かんでくる印象を重視しようである。	0.745	-0.004	-0.241	-0.048	0.052
3 強い内的感覚を引き起こすものを大切にしようである。	0.644	-0.086	0.157	0.109	0.038
10 作品を作るとき、これしかない、という強い確信がある。	0.456	-0.284	0.062	-0.147	0.142
21 作品を作るとき、どうしてもこうしかできない、ということがある。	0.455	-0.181	0.037	-0.335	-0.114
17 芸術を鑑賞するとき、その作品の感じが直接伝わってきてハッと驚く。	0.433	-0.118	0.356	0.044	0.277
F2「イメージの自律性」因子					
29 作品を作るとき、作りたいから出てくるイメージに自分をゆだねる。	-0.016	0.755	-0.136	-0.223	-0.117
8 作品を作るとき、そうしているうちに自分でも思いがけない表現が生じてくる。	0.058	0.751	-0.062	-0.075	-0.139
18 作品を作るとき、いったいなぜそうしたのかわけのわからぬうちに作品ができあがる。	0.041	0.690	0.014	0.079	0.201
30 作品を作るとき、知らないうちに自分の意図と関係なく作品が出来上がる。	-0.133	0.658	-0.005	0.144	0.128
9 作品を作るとき、自分が何かに動かされている感じがしない。(*)	0.222	0.618	-0.001	-0.144	0.323
28 作品を作るとき、自分が何か大きな力の通り道にすぎないと感じる。	0.004	0.576	0.334	-0.183	-0.065
F3「イメージの直接性」因子					
16 よく自分がなじんでいる景色が、突然生命力をみなぎらせて迫ってくるということはない。(*)	-0.099	-0.035	0.877	0.130	-0.051
5 いつも見慣れている自然の風景が、突然自分に生き生きと迫ってくる。	-0.094	-0.021	0.786	-0.042	0.140
13 芸術を鑑賞するとき、自分がその作品の中に入って作品世界をリアルに感じる。	-0.140	0.071	0.692	-0.277	-0.145
15 芸術を鑑賞するとき、作品がダイレクトにたまに自分に入って来る感じがする。	0.124	-0.086	0.688	-0.035	0.253
F4「イメージの意外性」因子					
6 作品を作るとき、作品を作る過程で予想外のことが起こることはない。(*)	0.081	0.104	0.153	0.717	-0.023
12 作品を作るとき、最初から自分の思い描いていたものになるように最後まで努力する。(*)	-0.044	-0.142	-0.214	0.660	0.167
32 作品を作るとき、作品はあらかじめ自分の思っていたとおりにできる。(*)	0.088	-0.039	-0.267	0.638	0.152
4 作品を作るとき、自分の一つ一つの動きは必然であると思う。(*)	0.250	0.313	-0.013	-0.632	0.020
22 作品を作るとき、作ろうと思っていたことがなぜかできなかった、ということがあがる。	0.243	-0.273	-0.033	0.563	-0.279
24 物語を書くとき、筋書きを考えて書きはじめるが、作中人物が筋書きをこえて動き出す。	-0.013	0.274	0.331	0.511	-0.066
(1) 物語を読むとき、その物語の世界を生き生きと感じる。	0.051	0.166	0.280	0.373	-0.352
F5「非合理的態度」因子					
2 作品を作るとき、すべて自分の思い通りになるようにする。(*)	-0.025	0.082	-0.192	0.358	0.674
25 合理的に生きることには大きな価値があると思う。(*)	0.071	0.023	0.119	0.090	0.593
14 自分の受ける印象より現実を的確に見極めることを重視しようである。(*)	0.013	-0.024	0.145	-0.344	0.554
31 ものごとを論理的に認識しようである。(*)	0.396	-0.121	0.216	-0.032	0.548
(27) 一瞬のうちに、自分が表現するには時間のかかるようなイメージがうかがう。	0.336	-0.013	0.258	0.206	-0.393
(19) 作品を作るとき、あれこれ細部まで考えながら作る。(*)	-0.285	0.218	0.121	0.315	0.388
固有値	4.050	3.687	3.881	3.543	2.566
累積寄与率(%)					52.85%

注) (*)が付けられた項目は、逆転項目を示す。下線のある項目が因子として採用された項目である。

表2. 自意識尺度の項目(菅原、1984)

F1「公的自意識」因子		F2「私的自意識」因子	
1 自分が他人にどう思われているのか気になる。		1 自分がどんな人間か自覚しようと努めている。	
2 世間体など気にならない。(*)		2 その時々々の気持ちの動きを自分自身でつかんでいたい。	
3 人に会う時、どんなふうにもふるまえば良いのか気になる。		3 自分自身の内面のことには、あまり関心がない。(*)	
4 自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる。		4 自分が本当は何をしたいのか考えながら行動する。	
5 人にみられていると、ついカッこうをつけてしまう。		5 ふと、一歩離れた所から自分をながめてみることもある。	
6 自分の容姿を気にするほうだ。		6 自分を反省してることが多い。	
7 自分についてのうわさに関心がある。		7 他人を見るように自分をながめてみることもある。	
8 人前で何かするとき、自分のしぐさや姿勢が気になる。		8 しばしば、自分の心を理解しようとする。	
9 他人からの評価を考えながら行動する。		9 つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている。	
10 初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気づかう。		10 気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取る方だ。	
11 人の目に映る自分の姿に心を配る。			

注) (*)が付けられた項目は、逆転項目を示す。

が有利なため^{iv}、全て終わってから筆者が先に置く人(以下、先手)に「何かし残したことはありますか」と尋ねるので、し残したことがあると感じた場合はその時にする、(v) 相手を見守る。被験者はじゃんけんをして置く順番を決め、筆者の立会いのもと、被験者2名で1つの箱庭作品を制作した。筆者は一巡ずつ写真撮影し、20~30分もしくは5~6巡が近づくと、「あと1巡です」などと被験者に声をかけた。制作後、被験者は自意識尺度(菅原、1984)(表2)と、調査1で得られたイメージ親和性尺度に回答した。

本研究では自意識の程度を測るために自意識尺度（菅原、1984）を用いた。自意識尺度は公的自意識因子と私的自意識因子の2因子から成る^v。公的自意識は「自己の服装や髪型、あるいは他者に対する言動など、他者が観察しうる自己の側面に注意を向ける程度に関する」（菅原、1984）ものであり、私的自意識は「自己の内面や感情、気分など他者からは直接観察されない自己の側面に注意を向ける程度に関する」（菅原、1984）ものである。評定は菅原（1984）と同様「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の7件法とした。

3-2. 結果と考察

(1)箱庭の分類：筆者と心理臨床専攻の大学院生2名の計3名で1巡ごとの写真と最終的に出来た箱庭の写真をもとに、箱庭の制作過程と最終的に出来た作品について全事例を協議した。箱庭制作過程におけるずれ生起の有無と、その後の様相については最終的に出来た作品のまとまりの有無の点に注目し、17事例について以下のように分類された：A群（ずれ有り、まとまり有り）が6事例、B群（ずれ有り、まとまり無し）が5事例、C群（ずれ無し、まとまり有り）が5事例、D群（ずれ無し、まとまり無し）が1事例。

分類に際しては、箱庭上でのペア間の関わりにおいて、ペアがお互い相手に沿っていて、この先も沿っていけるのではないかという分類者の予想・期待に対して、その予想・期待とくい違ふと分類者にとって感じられる事態が起きたとき、ずれが生起したと判断された。ずれが生起したと判断された時というのは、例えば、ペアの片方がアイテムに付与したと考えられるイメージの意味がペアのもう片方の置いたアイテム・置いた場所・置き方の点などによって変更された時、同じような種類のアイテムが置かれていたのがレベルの異なる意味を持つアイテムが置かれた等相手への沿い方が変更された時、それまでの箱庭の流れとは異なる空間配置でアイテムが置かれた時が挙げられる。また、最終的に出来た作品が1つの場面として分類者に感じられたり、作品から何らかのテーマが感じられたりした場合、まとまりが有ると判断された。箱庭作品が箱庭上で部分ごとに分かれていたり、部分間に全体としての関連が見いだしにくい場合はまとまりが有ると判断されなかった。

17事例は制作過程全体に1つのまとまった流れがあると感じられるものだったが、1事例はそうではなく、17事例と同じように検討するのは適さないと筆者が判断したため、その1事例は本研究では分析の対象としなかった。

(2)箱庭分類と各尺度の関連：各尺度の下位因子ごとに、被験者の尺度得点を算出した^{vi}。平均値を基準に被験者を高(H)・中(M)・低(L)に分け、ペアの組合せ(H/H～L/L)の6群)の各度数を求めた(表3)。以下の①～⑥の場合について直接確率法で検定した(表4)。

①ずれの有無について：ずれ有り群(A群+B群)とずれ無し群(C群+D群)を比較した。「公的自意識」では、ずれ無し群はずれ有り群よりも、H/HとM/Mが有意に多かった。これは、自分は相手からどう見られているかと他人を意識する程度が、ペアの両者とも中～高程度かつ同程度に持っているとき、ずれが起きていないことを示している。「イメージの自律性」では、ずれ無し群はずれ有り群よりもH/Hが有意に多かったが、H/Mはずれ有り群がずれ無し群よりも多い傾向だった。このことから、イメージを自分の意識の及ばぬこととして感じてイメージに自分をゆだねる程度がペアの片方は高く、さらにペア間でその程度に差があるということが、ずれの生起に

表3. 各尺度の尺度得点高低によるペアの組合せの度数

ペアの組合せ	自意識尺度			イメージ親和性尺度					尺度得点合計
	F1: 公的自意識	F2: 私的自意識	尺度得点合計	F1: イメージの必然性	F2: イメージの自律性	F3: イメージの直接性	F4: イメージの意外性	F5: 非合理的態度	
A群(n=6) (ずれ有り、まどまり有り)	H/H	0	0	0	0	1	1	2	1
	H/M	0	1	0	4	1	1	2	2
	H/L	3	2	3	4	0	1	0	1
	M/M	0	1	0	0	0	0	0	0
	M/L	2	1	3	2	1	4	2	1
	L/L	2	1	0	0	1	0	1	1
B群(n=5) (ずれ有り、まどまり無し)	H/H	0	1	0	0	0	0	0	0
	H/M	2	1	2	0	2	1	1	0
	H/L	1	0	0	0	1	1	0	1
	M/M	0	1	1	1	0	1	1	0
	M/L	2	0	0	1	2	1	1	4
	L/L	0	2	2	1	1	0	0	0
C群(n=6) (ずれ無し、まどまり有り)	H/H	2	1	0	0	1	1	0	0
	H/M	0	2	3	1	0	2	2	3
	H/L	1	0	1	2	1	0	1	1
	M/M	2	1	1	0	1	0	0	0
	M/L	0	1	0	2	1	0	2	1
	L/L	0	0	0	0	1	0	0	0
D群(n=1) (ずれ無し、まどまり無し)	H/H	0	0	0	0	1	0	0	0
	H/M	0	0	0	0	0	1	1	1
	H/L	0	0	0	0	0	0	0	0
	M/M	0	0	0	0	0	0	0	0
	M/L	1	0	1	1	0	0	0	0
	L/L	0	1	0	0	0	1	0	0

表4. 直接確率法による検定結果のまとめ

	尺度	因子	ペアの 組合せ	結果(*:有意, **:有意傾向を示す。)	
①ずれの有無について ...ずれ有り群(A群+B群)と ずれ無し群(C群+D群)の比較	自意識尺度	F1:公的自意識	H/H ずれ無し群>ずれ有り群	*	
			M/M ずれ無し群>ずれ有り群	*	
	イメージ親和性尺度	F2:イメージの自律性	H/H ずれ無し群>ずれ有り群	*	
			H/M ずれ有り群>ずれ無し群	**	
		F3:イメージの直接性	M/L ずれ有り群>ずれ無し群	*	
		尺度得点の合計	H/M ずれ無し群>ずれ有り群	*	
②まとまりの有無について ...まとり有り群(A群+C群)と まとり無し群(B群+D群)の比較	自意識尺度	F1:公的自意識	H/M まとり無し群>まとり有り群	*	
		F2:私的自意識	L/L まとり無し群>まとり有り群	**	
	イメージ親和性尺度	尺度得点の合計	H/L まとり有り群>まとり無し群	**	
			L/L まとり無し群>まとり有り群	*	
		F1:イメージの必然性	H/L まとり有り群>まとり無し群	*	
		尺度得点の合計	M/L まとり無し群>まとり有り群	*	
③ずれ有り群の中のまとまりの有無について ...A群(ずれ有り、まとり有り)と B群(ずれ有り、まとり無し)の比較	自意識尺度	F1:公的自意識	H/M B群>A群	**	
		尺度得点の合計	H/M B群>A群	**	
			H/L A群>B群	**	
			M/L A群>B群	**	
			L/L B群>A群	**	
	イメージ親和性尺度	F1:イメージの必然性	H/M B群>A群	**	
			H/L A群>B群	*	
		F2:イメージの自律性	H/M A群>B群	*	
		F5:非合理的態度	H/H A群>B群	*	
		尺度得点の合計	H/M A群>B群	*	
④ずれ無しの中のものまとまりの有無について ...C群(ずれ無し、まとり有り)と D群(ずれ無し、まとり無し)の比較	自意識尺度	F1:公的自意識	M/L D群>C群	*	
		F2:私的自意識	L/L D群>C群	*	
		尺度得点の合計	M/L D群>C群	*	
	イメージ親和性尺度	F4:イメージの意外性	L/L D群>C群	*	
⑤まとまり有りの中のずれの有無について ...A群(ずれ有り、まとり有り)と C群(ずれ無し、まとり有り)の比較	自意識尺度	F1:公的自意識	H/H C群>A群	*	
			M/M C群>A群	*	
		尺度得点の合計	H/M C群>A群	*	
	イメージ親和性尺度		M/L A群>C群	*	
		F2:イメージの自律性	H/M A群>C群	*	
		F3:イメージの直接性	M/L A群>C群	*	
⑥まとまり無しの中のずれの有無について ...B群(ずれ有り、まとり無し)と D群(ずれ無し、まとり無し)の比較	自意識尺度	尺度得点の合計	M/L D群>B群	*	
	イメージ親和性尺度	F2:イメージの自律性	H/H D群>B群	*	
		F4:イメージの意外性	L/L D群>B群	*	
		尺度得点の合計	H/M D群>B群	*	

関わっていると考えられる。「イメージの直接性」では、ずれ有り群はずれ無し群よりも M/L が有意に多かった。これは、イメージの生き生きとした力を感じる程度がペアで中～低程度である群はずれ有り群よりも H/M が有意に多かった。これは、イメージ全体に親しみを感じている程度がペアで中～高程度のとき、ずれが起きていないことを示している。

まず、自意識尺度の「私的自意識」は「ふと、一步離れた所から自分をながめてみることもある」「他人を見るように自分をながめてみることもある」等の項目のように、自分で自分自身を見つめて意識するさまを表している。これは、見つめる自分と見つめられる自分のように、自分の中で主客の分かれた意識のあり方を示していると考えられる。また、「公的自意識」は「自分が他人にどう思われているのか気になる」「人に会う時、どんなふうにふるまえば良いのか気になる」等の項目のように、自分が他人にどう見られているかと他人を意識するさまを表している。これは、他人の視点を通して翻って自分を意識するありようを表していると考えられる。

ずれ無し群は、自分が相手にどう見られているかと他人を意識する程度がペアの両者とも中程度以上かつペアで同程度である一方、イメージ全体に親しみをペアの両者ともが中程度以上に抱いている。ずれ無し群はペアの両者ともイメージの自律性を高程度に感じており、また、そもそもイメージの自律性を感じるにはイメージを自分の意識の及ばぬ他者として感じる必要があると考えられる。このように、ずれが生起しないペアは他人の視点を意識する程度が高く、イメージを感じる力やイメージを他者として感じる程度も高い。ずれ無し群は相手もイメージも他者として感じられるだけに、他人である相手への意識がまず強まってしまうのではないだろうか。ずれ無し群は全体としては、イメージという第3のものに開ける可能性を抱きながらも、自分と相手という二者関係の中でお互いに同程度に相手を強く意識し、その結果ずれが起っていない群であると考えられる。

ずれ有り群では、ペアの片方がイメージの自律性を感じる程度が高く、ペア間でその程度に差があるということが、ずれの生起につながっていると考えられる。箱庭制作はまず、相手を意識するという自意識のレベルで始まると思われるが、何かのときにペアの片方がイメージの自律性を感じて箱庭の世界に入っていくとずれが生起するのではないだろうか。

②まとまりの有無について：まとまり有り群（A 群+C 群）とまとまり無し群（B 群+D 群）を比較した。まとまり無し群はまとまり有り群よりも、「公的自意識」の H/M が有意に多く、「私的自意識」の L/L が多い傾向だった。自意識尺度合計では、まとまり無し群はまとまり有り群よりも、L/L が多かった。これらは、まとまり無し群は自分が相手にどう見られているかと他人を意識する程度は中～高程度だが、自分で自分自身を意識し反省する程度が両者とも低いペアが多い傾向にあり、自意識全体の程度が両者とも低いペアが多いことを示している。一方、自意識尺度合計と「イメージの必然性」では、まとまり有り群はまとまり無し群よりも H/L が有意に多かった、あるいは多い傾向だった。これは、自意識全体と自分の内側から起こるイメージの必然的な力を感じる程度について、ペアの片方のそれらの程度が低くても、もう片方のそれらの程度が高いことが、まとまりある作品につながることを示している。イメージ親和性尺度合計では、まとまり無し群はまとまり有り群より、M/L が有意に多かった。これは、イメージ全体に親しみを感じている程度がペアで低～中程度のとき、最終的にできる作品にまとまりがないことを示している。

まとまり無し群は、自分が他人からどう見られているかという意識、すなわち、他人の視点を

通して自分を反省する意識はペアの両者とも同程度に高いのだが、自分で自分自身を反省する意識がペアの両者ともに同程度に低い。また、イメージ全体に対する親しみが中～低程度のペアが多かったことから、全体としてまとまり無し群は、箱庭制作時、お互い相手をとても気にするのだが、自分で自分自身を反省する^Ⅶ程度は低く、箱庭から起こるイメージをそれほど強く感じずに箱庭を制作していったと考えられる。つまり、第3のものであるイメージを誘発しうる箱庭の上でやりとりを行ってはいけるのだが、まとまり無し群は相手と自分という二者関係のレベルでやりとりを行っていたと推測される。

まとまり有り群は、自意識全体と自分の内側から起こるイメージの力について、ペアの片方はそれらの程度が高いが、もう片方はそれらの程度が低く、ペア間でその程度にかなり差があるペアが多かった、あるいは多い傾向にあった。本研究での箱庭作品にまとまりをつけるためには、自分と相手のたどってきたそれまでの制作過程を受けつつ、箱庭全体としていかにおさまりをつけるかと自ら努力することも必要であると考えられる。このことを踏まえると、全体としてまとまり有り群は、ペアの片方が、意識的に、あるいはイメージの持つ必然的な力に動かされて、主にまとめる作業を行ったと推測される。

③**ずれ有り群の中のまとまりの有無について**：A群とB群を比較した。「公的自意識」では、B群はA群よりもH/Mが多い傾向だったことから、ずれが有ってまとまりの無い群はずれが有ってまとまりの有る群よりも、相手を意識する程度が中～高程度であるペアが多いと推測される。また、自意識尺度合計では、B群はA群よりもH/Mが多い傾向だったが、A群はB群よりもH/Lが多い傾向だった。このことから、A群・B群ともにペアの片方の自意識全体の程度が高程度かつペアのもう片方のその程度が中程度だとずれが有ってまとまりが無いことにつながり、ペアのもう片方のその程度が低程度だとずれが有ってまとまることにつながると推測される。さらに、自意識尺度合計ではB群はA群よりもL/Lが多い傾向だったが、A群はB群よりもM/Lが多い傾向だった。このことから、A群・B群ともにペアの片方は自意識全体の程度が低程度で、かつ、ペアのもう片方の自意識全体の程度も低程度だとずれが有ってまとまりが無いことにつながり、ペアのもう片方の自意識全体の程度が中程度だとずれが有ってまとまることにつながると推測される。「イメージの必然性」では、B群はA群よりもH/Mが多い傾向だったが、A群はB群よりもH/Lが有意に多かった。このことから、A群・B群ともにペアの片方は自分の内側から起こるイメージの力を感じる程度が高程度かつペアのもう片方のその程度が中程度だとずれが有ってまとまりが無いことにつながり、ペアのもう片方のその程度が低程度だとずれが有ってまとまることにつながると考えられる。以上より、ずれが生じた後作品がまとまるには、ペアの片方の自意識全体の程度が高いときはペアのもう片方の自意識全体と程度の差がかなりあること、ペアの片方の自意識全体の程度が低いときはペアのもう片方の自意識全体と程度の差があること、ペアの片方のイメージの必然性を感じる程度が高いときはペアのもう片方のその程度の差がかなりあることが関係していると推測される。「イメージの自律性」のH/M、「非合理的態度」のH/H、イメージ親和性尺度合計のH/Mでは、A群はB群よりも有意に多かった。これらはずれが生じた後作品がまとまるには、自分の意識の及ばぬこととしてイメージを感じてイメージに自分をゆだねる程度がペアで中～高程度であること、非合理的な事柄に開けている程度がペアの両者とも高程度であること、イメージ全体に対する親しみがペアで中～高程度であることが関わっていることを示し

ている。

①より、イメージの自律性を感じる程度がペアの片方は高いがペア間で程度に差があるということがずれの生起に関わっていると考えられた。また②より、作品にまとまりが有る場合は、ペアの片方が意識的に、あるいはイメージの持つ力に動かされて、主にまとめる作業を行ったと推測された。ずれが有った後作品がまとまらないB群は、自意識全体の程度が中～高程度のペアと両者とも低程度のペアがA群より多い傾向だったが、①・②の結果を考え合わせると、B群のうち自意識全体の程度が中～高程度のペアは、互いにある程度自意識があるだけに、ずれの生起後、相手を気にして作品のまとまりをつけられなくなったのかもしれない。また、B群のうち両者とも自意識全体が低程度のペアは、両者ともまとめようとする努力がなされず、箱庭がまとまらないことになったのかもしれない。

A群では、ペアの片方の自意識全体の程度が高くてペアのもう片方が低い場合は自意識の高い方が、ペアの片方の自意識全体の程度が低くてペアのもう片方が中程度の場合は中程度の方が、主にまとめる作業を行ったと推測される。A群は、B群よりもペア間でイメージの必然性を感じる程度に差があるが、イメージの自律性の程度がペアの両者とも中程度以上であり、非合理的な事柄にペアの両者とも高程度で開けている。イメージ全体への親しみがペアで中～高程度である。このことより、イメージの自律性や非合理的態度の点でイメージに開けていて、イメージ全体に親しみを感じていることが、ずれが生起した後作品がまとまることにつながっていると考えられる。よってB群のようにペアの両者の自意識全体の程度が中～高程度でずれが起こった場合は、イメージに関するそれらの程度が、ずれが起こった後の展開に関わっていると言えるだろう。

④ずれ無し群の中のまとまりの有無について：C群とD群を比較した。D群はC群より、「公的自意識」のM/L、「私的自意識」のL/L、自意識尺度合計のM/Lが有意に多かった。また、D群はC群より、「イメージの意外性」のL/Lが有意に多かった。これらの結果は、自分が相手にどう見られているかと意識する程度がペアで中～低程度であること、自分で自分自身を意識し反省する程度がペアの両者とも低程度であること、自意識全体としてもその程度がペアで中～低程度であることが、ずれが無いにもかかわらず作品のまとまりが無いことにつながっていることを示している。また、D群はC群より「イメージの意外性」のL/Lが有意に多かった。これは、ずれが無いにもかかわらず作品にまとまりが無い群は、最初は自分の意志を持ってイメージに関わるが途中で自分の意志通りにならないことに出会うという程度がペアの両者とも低程度であることを示している。

D群は自意識全体の程度がペアで中～低程度で、特に自分で自分を意識し反省する程度がペアの両者とも低い。イメージの意外性を感じるためにはまず自らイメージに関わろうとすることが必要だと考えられるが、それもペアの両者とも低い。つまり、D群はペアの両者とも相手がどう思っているかと相手に意識を向ける程度もそれほど高くなければ、自分に意識を向けて自分自身を反省する程度も低く、イメージに意識を向けてイメージに関わっていく程度も低いペアが多いと言えるだろう。D群はペアの両者とも、ペアの相手や自分自身や箱庭から誘発されるイメージにそれほど自分の意識を向けないままに、箱庭制作をしていたと考えられる。D群はずれが生起していないと判断された群だが、相手に自分の注意を向けて「期待する」までいかなかった群であると言えるかもしれない。

⑤まとまり有り群の中のずれの有無について：A群とC群を比較した。C群はA群より、「公的自

意識」の H/H と M/M が有意に多かった。これは、自分は相手からどう見られているかという意識の程度がペアの両者とも中～高程度かつ同程度であることが、ずれが無くて作品にまとまりが有ることにつながることを示している。自意識尺度合計では、C 群は A 群より H/M が有意に多かったが、A 群は C 群より M/L が有意に多かった。これは、自意識全体の程度がペアの片方は中程度かつペアのもう片方のその程度が高程度の場合は制作過程でずれが無くて作品にまとまりがあり、ペアのもう片方のその程度が低程度の場合はずれが有って作品にまとまりがあることにつながることを示している。また、A 群は C 群より、「イメージの自律性」の H/M、「イメージの直接性」の M/L が有意に多かった。これは、イメージを自分の意識の及ばぬこととして感じてイメージに自分をゆだねる程度がペアで中～高程度であること、イメージの生き生きとした力を感じる程度が中～低程度であることが、ずれが生じた後作品にまとまりがあることにつながることを示している。

A 群と C 群はともに最終的にできた作品にまとまりがある群である。②より、まとまりが有る群は、ペアの片方が意識的に、あるいはイメージの持つ必然的な力に動かされて、主にまとめる作業を行ったと推測された。その中でも C 群は、自分は相手からどう見られているかという意識をペアの両者とも中～高程度かつ同程度に持っていることから、制作過程ではお互い同程度に最後まで絶えず相手を気にしていたと考えられる。これに対して A 群は、自意識全体が中～低程度のペアが多く、制作過程ではペアの片方は相手や自分を中程度に気にしながらも、もう片方はあまり相手や自分を気にしていなかったと考えられる。けれども A 群はイメージの自律性を中～高程度に感じているペアが多く、また①より、ずれの生起にはイメージの自律性を感じるに関わっていると考えられたことから、ペアの片方が自分の内側から起こるイメージの自律性にいざなわれて制作過程でずれが生じたと考えられる。③より、作品がまとまるには、ペアの片方の自意識全体が中程度以上で、ペアのもう片方の自意識全体が低程度であることが関わっていると考えられた。A 群は自意識全体の程度が中～低程度のペアが C 群より多かったことより、A 群でもペアの片方が主にまとめる作業を行ったのかもしれない。

⑥まとまり無し群の中のずれの有無について：B 群と D 群を比較した。D 群は B 群より、自意識尺度合計の M/L、「イメージの自律性」の H/H、「イメージの意外性」の L/L、イメージ親和性尺度合計の H/M が有意に多かった。これは、ずれが無くてまとまりが無い群は、ずれが有ってまとまりが有る群よりも、自意識全体の程度がペアで中～低程度であり、イメージを自分の意識の及ばぬものとして感じてイメージに自分をゆだねる程度がペアの両者とも高程度だが、自分の意志を持ってイメージに関わって途中で自分の意志通りにならないことに出会う程度はペアの両者とも低程度であり、イメージ全体に対する親しみはペアで中～高程度であることを示している。

D 群は、イメージが独自の動きを持っていることはペアの両者とも高程度に感じ、イメージ全体に対しても親しみを中～高程度に感じているが、自ら意志を持ってイメージに関わる程度はペアの両者とも低く、自意識全体も中～程度である。これらのことから、D 群はイメージに対する働きかけや意識的なひっかかりがないまま、イメージの中に入っていった箱庭を制作していたと考えられる。②より、作品としてまとまるためには少なくともペアのどちらかの努力が必要であると考えられた。けれども D 群では自意識全体の程度が中～低程度であり、ペアのどちらも努力がなされずイメージの世界に入ったままで、その結果、作品のまとまりがなくなったのではない

だろうか。D 群は C 群同様ずれが無かったと判断されたとはいえ、C 群の制作プロセスとは意識のありようが異なると考えられる。

⑦まとめ：①～⑥より、ずれの生起、まとまること、および各群について、以下のように考えられた。イメージの自律性を感じる程度がペアの片方は高程度で、その程度にペア間で差があることがずれの生起につながっていると考えられた。作品がまとまるとき、ペアの片方が意識的に、あるいはイメージの持つ必然的な力に動かされて、主にまとめる作業を行ったと推測された。ずれが有ってまとまりが有った A 群では、ペアの両者とも非合理的な事柄に開けていて、イメージ全体に対してもペアの両者が中～高程度に親しみを抱いていることが、ずれが生じた後作品がまとまることに関係していると考えられた。ずれが有ったがまとまりが無かった B 群は、自意識全体の程度が中～高程度であることで相手を気にして、かえってずれが生じた後まとまりをつけられなくなったと推測された。ずれが無くてまとまりが有った C 群は、相手を気にする程度が中～高程度かつペアで互いにその程度が同程度だったペアが多く、お互い同じように相手を絶えず気にすることでずれが起こらなかったと考えられた。ずれが無くてまとまりが無かった D 群は、相手や自分自身やイメージに対して、自分の注意を向けたりひっかかったりということがそれほどないまま、イメージの世界に入って作品制作が進められ、ペアの両者とも作品をまとめる努力がなされず、作品にまとまりがない結果となったと考えられた。

4. まとめと今後の課題

本研究は、心理臨床におけるずれを治療関係におけるものと表現時におけるものとに区別し、治療関係におけるずれを扱った。そして調査を行い、初対面の人同士が出会い、相手に沿ってこうとする作業を共に行うときのプロセスを、ずれの生起の有無と作品のまとまりの有無の点から 4 群に分けて提示した。その 4 群と、ペアの各人がもともと持っている自意識やイメージの程度がどのように関連しているかを、統計的分析を通して検討した。本研究は実際の治療関係を扱ったものではなく調査研究であるという限界はあるが、ずれの生起、まとまること、および 4 群の特徴について検討された内容は、実際の治療関係におけるセラピストの視点となる可能性がある。つまり、実際の治療関係も初対面の人同士が会合うところからはじまるが、クライアントの自意識とイメージへの親和性の程度によって、またセラピストのそれらの程度とクライアントのそれらの程度の差によって、ずれが起こりうるか、また、起こるとすればどのような過程で起こりうるか等を考えるセラピストの視点へとつながると考えられる。

本研究ではずれについて、箱庭制作過程でずれが生じたかどうかで分類を行ったが、今後は箱庭制作過程に即して、いつ、どのようにずれが生じたかを検討することが必要だと考えられる。また本研究では箱庭の分類を心理臨床を専攻する者によって行った。いわば外の視点から分類したのだが、ずれがいかにかに体験されているかという視点からもずれを検討することが今後必要だと考えられる。

ⁱ 京都大学教育学部心理教育相談室紀要臨床心理事例研究第 24 号 (1997)。

ⁱⁱ 岡田 (1997) は、ケースカンファレンスで検討されるケースの中には、クライアントの表現に対するセラピストの受けとり方がずれているがそのようにずれていることがむしろセラピーを促進させてさえるように感じられる場合があることを、例を挙げ

て述べている。

iii 本研究においてイメージとは、「ある個人の内界に存在」し、「内界の存在の意識化されたものとしてあらわれてくる」ものであり、さらに「内界にはそれ自体の自律性があり、人間の反省の及ばぬ領域がある」とする（河合、1991）。

iv 後手が、最後に作品をどのようにでも扱えると考えられるためである（岡田、1993）。

v 菅原(1984)は、436名(男性272名、女性162名)の回答を対象に因子分析(主因子解、バリマックス回転)を行い、これらの因子を得ている。折半法による信頼性係数は、公的自意識が0.78、私的自意識が0.75(ともに $p<.001$)だった(菅原、1984)。

vi 自意識尺度については、菅原(1984)の因子をそのまま用いた。

vii 調査2の場合、自分で自分自身を反省するときというのは、例えば、自分がアイテムを置いた後に箱庭を見て、自分が置いたアイテムを自分がどう感じるかといった場合が考えられる。

【引用文献】

樋口和彦・岡田康伸（編）（2000）『ファンタジーグループ入門』。創元社。

市原有希子（2009）心理臨床におけるずれの性質と働き。京都大学大学院教育学研究科紀要、55、227-239。

Kalff, D. (1966) SANDSPIEL Seine Therapeutische Wirking auf die Psyche. Verlag, Zürich und Stuttgart. (河合隼雄監訳 (1972)『カルフ箱庭療法』。誠信書房。)

河合隼雄（1986）『心理療法論考』。新曜社。

河合隼雄（1991）『イメージの心理学』。青土社。

河合隼雄・中村健二郎（1993）『新装版 トボスの知 箱庭療法の世界』。TBS ブリタニカ。

河合俊雄（1997）心理療法における「ずれ」。京都大学教育学部心理教育相談室紀要臨床心理事例研究、24、23-24。

川崎克哲（2003）「第6章 イメージを布置する技法——箱庭療法において“箱”の中に“ミニチュア”を“置く”ことの意味」、皆藤章（編）『臨床心理学全書第9巻 臨床心理面接技法2』、誠信書房。

Meier, C. A. (1968) Die Empirie des Unbewußten : mit besonderer Berücksichtigung des Assoziations-experiments von C.G.Jung. (河合隼雄（監修）、河合俊雄・森谷寛之（訳）『ユング心理学概説1 無意識の現れ：ユングの言語連想検査にふれて』1996年、創元社)

小川捷之・河合隼雄・原野広太郎・伊東恵子・小川洋子（1969）心理療法における治療者のタイプと治療技法。臨床心理学研究、8(3)、165-176。

岡田康伸（1997）臨床場面におけるズレについて。京都大学教育学部心理教育相談室紀要臨床心理事例研究、24、20-22。

大山泰宏（2001）「因果性の虚構とこころの現実」。『講座心理療法 第7巻 心理療法と因果的思考』。岩波書店。

Rogers, C. R. (1957) The necessary and sufficient conditions of Therapeutic personality change. *Journal of consulting psychology*. 21, 95-103. (「第6章 治療的パーソナリティ変化の必要にして十分な条件」。伊東博（編訳）（1966）『ロージャズ全集4 サイコセラピーの過程』。岩崎学術出版社。)

菅原健介（1984）自意識尺度（self-consciousness scale）日本語版作成の試み。心理学研究、55、184-188。

（心理臨床学講座 博士後期課程3回生）

（受稿2009年9月7日、改稿2009年11月30日、受理2009年12月11日）

A Study on “Difference and Its Movement” in Clinical Psychology: From Research with Sandplay

ICHIHARA Yukiko

This study defined “difference and its movement” between two persons as a process that “first, both of two try to fit the other; then they expect to be able to fit the other, but a matter that conflicts with the expectation happens”. This study aimed to illustrate that under what conditions “difference and its movement” happens or not, and after it happened, how “difference and its movement” will work on them. For this aim, this study conducted a research with sandplay, which two unacquainted subjects made a sandplay work together, putting items by turns without conversations. And two subjects answered 2 scales, the self-consciousness scale and the scale of familiarity with image. Seventeen sandplay works which were produced from the research were classified into 4 groups, from the views that whether “difference and its movement” happened or not during each making process and whether each sandplay work had unity or not. After statistical examinations, considerations from the results are as follow: regarding the degree of feeling autonomy of image, the gap of it between the two subjects relates to happen “difference and its movement”. After it happened, that both of the two are familiar with irrational matters and image as a whole relates to the unity of the sandplay works. When both of the two have self-consciousness in middle to high levels and the levels are in similar extent, “difference and its movement” tends to not happen.